

ESD  
Award  
2020

# 第14回ESD大賞 受賞校実践集

主 催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

後 援：文部科学省 / 日本ユネスコ国内委員会 / 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター  
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 / 株式会社教育新聞社

## はじめに

Education for Sustainable Development (ESD) は、「持続可能な社会の担い手を育む」教育といわれています。

地球上の様々な課題を自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人材を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育です。

NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、この ESD の理念に基づく取組を積極的に実践する学校を奨励する「ESD 大賞」を 2010 年に創設いたしました。

本事業は、全国の ESD の優れた実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与することを目指しております。

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではありましたが、第 14 回 ESD 大賞として、ここに受賞校を発表し、その実践をまとめました。

本実践集が少しでも ESD 実践の参考・発展へとつながり、持続可能な社会の担い手づくりに寄与できれば幸いです。

## 目 次

◆はじめに	2
◆講評	4
◆文部科学大臣賞	
勝山市立成器南小学校	6
◆ユネスコスクール最優秀賞	
宮城県仙台第三高等学校	9
◆優秀賞	
気仙沼市立鹿折小学校	12
大仙市立大曲南中学校	15
浜松開誠館中学校・高等学校	18
◆精励賞	
社会福祉法人心耕福社会　ひかりの森こども園	21
東海大学付属大阪仰星高等学校中等部	24
◆審査員特別賞	
Lao Japan School	28

## 【講評】

細谷 美明

NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム理事、第14回ESD大賞審査委員長

### 【文部科学大臣賞】勝山市立成器南小学校（福井県）

地域の良さを知るためにまず教員のアプローチから始めたことが高く評価できる。そのことで児童が地域や卒業生と積極的に交流することにつながっている。実践についても、間伐材を使った割りばしづくりやそば粉のパッケージデザイン、さらにその成果をCM制作でアピールする点など地域への貢献を意識し、まさに「地域と共に生きる学校」そのものの姿を示してくれた。

### 【ユネスコスクール最優秀賞】宮城県仙台第三高等学校（宮城県）

「Think globally, Act locally」のお手本のような事例であるとともに、地域素材を学習教材として開発し普通の授業でも活用しており、まさに研究と実践を兼ね備えているアカデミックな内容である。さらに地域の様々な課題に対する提言も行うなど地域貢献も果たしており、ユネスコスクールの模範となる実践である。

### 【優秀賞】気仙沼市立鹿折小学校（宮城県）

ESD 計画に基づいた系統的なカリキュラムがあり全学年がそのカリキュラムに基づき実践を行っている点は高く評価できる。特に活動内容に学年ごとの特色があり、なおかつ次の学年につながる効果的な内容になっている。また、高学年になるほど学習の振り返りが多く、児童の深い学びが定着している。

### 【優秀賞】大仙市立大曲南中学校（秋田県）

ESD カレンダーとストーリーマップにより教科横断的な学習が行われていることが各教科の教育活動の質を高めている。また、学年間の系統性もありねらい通りの能力が身に付いている。企業とタイアップした学習の内容をより詳細に示してあるとさらによかった。

### 【優秀賞】浜松開誠館中学校・高等学校（静岡県）

理念、活動内容、活動方法、活動計画などほぼ完ぺきな内容で、国際性も加味しており中高一貫校らしいダイナミックで深みのある実践である。できれば普通の授業の様子や生徒の変容などのデータが添付されているとさらに高い評価が得られたであろう。

**【精励賞】社会福祉法人心耕福祉会 ひかりの森こども園（宮崎県）**

コンポストを使っての野菜くずの堆肥づくりだけでなく、それがニワトリの飼育に発展する発想はユニークであり、幼稚園ではあるが科学的能力の育成を目標にしている点も興味深いものがある。幼児教育の視点から、活動を通し涵養された道徳心に関する記述があるとさらによかった。

**【精励賞】新渡戸文化中学校・高等学校（東京都）**

私立校ならではのクロスカリキュラムを生かした多彩な活動は他校を圧倒する存在感があった。生徒一人一人の成長が数々の受賞で示され、わかりやすかったが、受賞した生徒の作品そのものを2,3ズームアップして紹介するとさらにわかりやすかった。

**【精励賞】東海大学附属大阪仰星高等学校 中等部（大阪府）**

3年間の系統的な学習計画や地域の商店街・企業と連携しての活動、振り返り活動による生徒の分析による変容や成長がよく理解できる報告であり今後も是非継続してもらいたいと思わせる実践である。大人からの助言や地域・企業の変容・反応が分かる資料があればさらによかった。

**【審査員特別賞】Lao Japan School（ラオス人民民主共和国）**

5S（整理、整頓、清掃、清潔、しつけ）指導やESD教育（持続可能な消費活動、環境・気候に関する教育など日本の教育の良さを取り入れた取り組み、さらに日本の大学との交流活動やスポーツ、健康、音楽などの多彩な教育活動は高く評価でき、今後の実践が大いに期待できる。

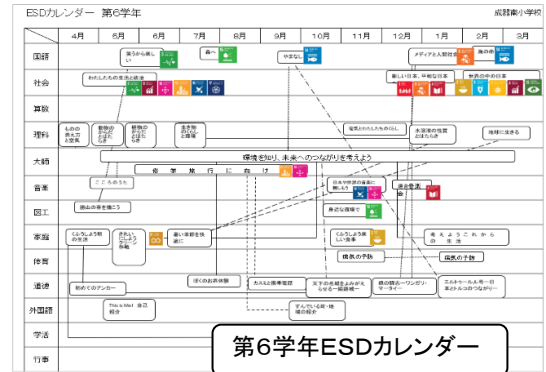
～ふるさと勝山の魅力発見・発信！～

1. はじめに

全校児童270名、教職員21名の本校は、四方を美しい山々や水田に囲まれ、周辺には一級河川の九頭竜川が流れる自然豊かでのどかな地域に位置している。児童は身近な自然に親しみながら生活している。平成26年度からユネスコスクールの認定を受け、ESDカレンダーを各学年作成し、SDG sの目標に関連づけて教育活動を展開している。

本校のESDテーマは「ふるさと勝山の魅力発見・発信！」である。50年後に消滅する可能性があるといわれているふるさとではあるが、大人になっても自分達が住み続けたい勝山市を目指して、ふるさとの魅力を発見し、発信する活動を全校体制で取り組んでいる。

自分たちの活動を家庭や、地域、市に『発信』する活動を取り入れ、思考力・判断力を高め、つながりを大切にして自分の思いを発信できる児童の育成のためNIE実践を積極的に推進した活動展開をしている。



2. 実践内容

ふるさと勝山の魅力を聞くと、「自然が豊か」「恐竜」「平泉寺」と答える児童が多く、校区の魅力については「わからない」「何もない」と答える児童が多かった。しかし、本当に自然が豊かなのか、校区の魅力にはどんなものがあるのか、自分の言葉でしっかり伝えたいと考えるようになった。そこでふるさとについて見つめ直し、見つけたことや気づいた魅力を周囲に発信することにした。大人になっても自分達が住み続けたいふるさとを目指して全校体制で取り組んでいる。

(1) 雪室そばのパッケージデザインで勝山の魅力発信！

校区には、雪を貯蔵する雪室がある。その魅力について、市の未来創造課の方と福井大学の方を講師として招き、現地で見学をすることを通して学んだ。さらには、雪室の考案者でSNOW BIZ代表である伊藤さんにも来ていただき、雪の可能性についての魅力を学んだ。その雪室で貯蔵している橋詰製粉所の雪室そばのパッケージに、児童が考案した勝山の魅力をデザインして周囲に発信し、「雪室そば」のブランド化を図ろうとした。

そのために、クリエイティブディレクターの橋島康祐(株式会社ハングオーバープレート)と本企画全体のプロデューサー山崎瑠美さん(株式会社ハングオーバープレート代表)を講師として、魅力を発信するためのブランディングの考え方や方法についてまず学んだ。橋島さんは、JAXAのロゴや、男子プロバスケットボールリーグ「B.LEAGUE」のロゴ、爽健美茶のラベルのデザインなどを手掛けている、現在第一線で活躍されているクリエイティブディレクターである。

魅力発信の方法の一つであるロゴや、パッケージデザインの方法について学び、パッケージにふるさと勝山の魅力をデザインしようと試みた。子どもたちが考えたのは、「九頭竜川」「アユ」「キョウリュウ」「越前大仏」「勝山の四季」「平泉寺」「左義長」。児童が考えたデザインを基に、橋島さんたちのアドバイスをいただきながら修正し、8種類のパッケージを完成させた。完成したものは道の駅「恐竜渓谷かつやま」などで販売された。

また、雪室そばに、自分たちの考えた勝山の魅力を盛り込んだ雪室そばオリジナルメニューも並行



**半年かけ完成 雪室そばパッケージ**

**勝山の児童続々とデザイン**

白山神社や恐竜など8作品

R5.7.5 日刊県民福井

しながら考えた。考えたメニューを、校区の福彩り食堂のむら屋の店長さん来校してもらい、子どもたちがプレゼンをして提案した。その結果、キョウリュウをテーマにした「雪室ダイナそば」が採用された。メニュー名も子どもが考えたものである。2023年の夏限定で販売され、好評を博した。

(2) ふるさとの環境保全活動

<実践1 間伐割りばしで地球環境改善を！>

NPO法人エコプラザさばえの事務局長さんを講師に招き、山と海がつながっていること、街から出るゴミが海に流れ着いてしまっていることを学習した。その中で間伐が里山保全に大切なことから間伐割り箸を教えていただき、その後の商品化のヒントをもらうことになった。

自分たちができることをしようと、まず校区にある九頭竜川に出向き清掃活動を行った。ゴミの実態を知ると大人が出しているゴミが多いことを知り、大人の力も借りようと「クリーンアップ九頭竜川」に親子で参加し清掃活動を行った。また、特定非営利活動法人エコプランふくいの高島直子さんから海洋ゴミの問題をさらに詳しく聞くことでSDGsの理解を深めることができた。さらに、株式会社福井グリーンパワーの方から、福井県の人工林の間伐した木材の使用による発電について学習。講師の「地産地消」「地元の林業に従事する人を大切に」と、地元で根ざした木質バイオマス発電の意義を聞く中で、以前学習した間伐割りばしの販売に協力できないか考えるようになっていった。

間伐割り箸がどのように販売されているのか福井県県産材活用課に聞くと、販売している株式会社折玉さんを紹介していただいた。箸袋のデザインを小学生が考案することにより、より間伐割り箸を世の中に広めることができる可能性を知ることができた。

ここで、大麦ストローを販売している株式会社大麦倶楽部の重久弘美さんから、どうしても値段が高くなる大麦ストローを販売するためにお土産としている、と販売のアドバイスをいただくことができた。そこで道の駅「恐竜溪谷かつやま」に販売許可をいただき商品を納入することにたどりつくことができた。現在も購入が絶えず行われている現状である。これからも大人や子どもたちもたくさんの人に環境問題に関心をもってもらえるように願っている。

<実践2 外来種駆除活動>

在来種のススキの生息を脅かすセイタカアワダチソウの駆除活動を行い、勝山本来の美しい風景を取り戻そうと考えた。そこで事前に調査を行いどのあたりに分布しているのかを調べた。そして、活動後は、どうすると外来種を減らし、勝山本来の美しい自然を取り戻すことができるのか考えた。そこで、セイタカアワダチソウが外来種であることを周囲に知ってもらい、目を向けてもらうことをねらい、チラシを作成して配布しようと考えた。また、報道の力を借りて、駆除活動の必要性を訴えた。この活動はこれで3年目になる。子どもたちは「セイタカアワダチソウを駆除することで、ススキがたくさんもどってくれるとうれしい」と意欲的に取り組んでいる。



**間伐材割り箸 商品化だ**  
勝山・成器南小児童 県産スギ使い

**地元道の駅で販売**

環境保全に貢献しよう  
と、勝山市成器南小の6年生が県産スギの間伐材を使った割り箸を商品化した。

「みんなで読もう」  
環境保全に貢献しよう  
と、勝山市成器南小の6年生が県産スギの間伐材を使った割り箸を商品化した。

19日、同市の道の駅「恐竜溪谷かつやま」で販売を始めた。売上げは環境保全に役立てる予定で、「販売する場所ももっと増やしたい」と盛り切っていた。

6年生54人は総合的な学習の時間で環境について学ぶ中で、身近な林の保全や資源の有効活用につながることを考え、県産間伐材の割り箸を普及させたいと発案。福井市の取扱業者の協力で商品化につなげた。箸袋のデザインは児童が考案。割り箸をイメージしたオリジナルキャラクターのイラストを入れ、「食卓から、未来を守りませんか」などのメッセージを載せたりした。児童の取り組みに、同駅「地元の人たちが贈る商材をもっと増やしたい」と挨拶。スペースを提供し、10膳入りセットを110円で販売する。販売初日は児童代表4人が同駅を訪ね、木下和寛駅長(43)に「よろしくお願いします」とあいさつ。20セットを納品し、自分たちで陳列した。教諭佐藤君(1)は「ススキのいい香りがするのぜひ使ってもらいたい」とPRしていた。(柱知之)

R4.10.20 福井新聞

**勝山成器南小児童 外来植物駆除に汗 環境保全へ作業**

勝山市成器南小5、6年生約80人が2日、同校近くの畑で外来植物セイタカアワダチソウを駆除した。写真、環境教育の一環で、在来種のススキの生息域を脅かす外来種を減らし原風景を取り戻そうと企画した。地域住民の約300平方メートル、高さ50センチほどのセイタカアワダチソウを根が残らないよう引き抜いた。6年の柳橋幸太君は「強い力が必要で大変だった。普段から駆除に努めたい」と話した。児童は今後、活動内容をチラシにまとめる。(塚本剛史)

R5.11.7 福井新聞



(3) 勝山の魅力をCMにして発信！

これまで発見した勝山の魅力を多くの人に知ってもらうために、魅力をCMにして、発信しようと考えた。そこで、地域おこし協力隊であり、映像クリエイターの成東匡祐さん、PRプランナーであり、株式会社AB10の木村真奈美さんを講師に招き、発信のポイントを学んだ。成東さんは、アーティストのミュージックビデオや企業・商品のCM制作を手掛けたりするなど、映像業界の第一線で活躍されているプロである。

30秒間という限られた時間内で魅力を紹介するために、絵コンテをチームごとに作成し、アドバイスをいただきながら、撮影の仕方、編集の仕方などを学んだ。出前授業やオンラインでの授業を重ね、子どもたちは意欲的に活動に取り組み、「ふるさと福井CMコンテスト」の締め切りに向けて、最終作業にもがんばる姿が見られた。一人でも多くの方が自分たちの住むところに足を運んで、ふるさと勝山の魅力にふれてほしい、と願っている。

3. 成果と課題

現在公益財団法人日本バスケットボール協会の会長であり、オリンピックメダリストである三屋裕子さんは、本校の卒業生である。2022年に、当時5年生対象に、道徳の授業で裕子さんの挑戦する姿勢について授業を行った。裕子さん本人からも動画メッセージをいただいた。



2023年夏に、クリエイティブディレクターの橋島さんとプロデューサーの山崎さんが三屋裕子さんを訪問し、児童がデザインした雪室そばを児童の想いと共にプレゼントしてくださった。橋島さんが男子プロバスケットボールリーグ「B. LEAGUE」のロゴをデザインした経緯もあり、裕子さんに会うことができたようである。雪室そばをプレゼントされた裕子さんは喜び、子どもたちの活躍を応援してくださっている旨を聞くことができた。このことは児童にとって大きな励みとなり、より多くの方に魅力を伝えようと意欲を高めた。

これまでの活動をふりかえり、全校児童に「勝山が好きか」とアンケートを取った。すると、9割近くの児童が、「自然が多い」「人がいい」という理由で「好き」と答えている。特に、6年生においては、全国学力状況調査の「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という設問に6割近くの児童が「そう思う」と、答えている。そして、もっと多くの人に自分の住んでいるところを知ってもらいたい、と考えている。また、「勝山のいいところが言える」と答えた児童は約8割に上った。本学習の中心として取り組み、様々な活動によりこれまでには得られなかった貴重な体験ができた成果であると考えられる。

自分たちの活動を、NIE を一つの発信の手段としていくことで、自分たちの取り組みに共感し、応援してくれる人たちが増えることを体感することができ、さらなる意欲を持つことができた。同時に子どもたちの思いを発信するスキルの向上にもつながり、自己肯定感の向上にも寄与した。ふるさと愛を一層育んだ子どもたちに、今後もSDGsの視点を通し、様々な角度から物事を見つめ、考えを深めていけるスキルを身につけさせていきたい。大人になっても、ふるさとの魅力を自分の言葉で発信し、ふるさとを盛り上げていける子どもたちに成長してほしい。それが様々なSDGsの目標の達成につながる新たな考え方や行動を生み出すことにつながり、ふるさと勝山を創造する持続可能な社会の担い手となると期待している。

**地域CM制作へ 児童にプロ指南**  
勝山・成器南小

勝山市成器南小でこのほど、映像での情報発信の仕方などを学ぶ授業が行われた。地域の魅力を発信するCM制作に取り組み、6年生44人がプロの映像クリエイターから話を聞き、今後の参考にしたい。

同校6年生は、6月に市

成東さん(左から)自身が手がけた映像を見て情報発信のポイントを学んだ授業。勝山市成器南小

成東さん(33)と、企業PRを手がけるAB10(木村真奈美)のサポートを受け、CM制作に取り組んでいる。成東さんは映像制作会社勤務時に自身が手がけたCMやプロモーションビデオを紹介し「印象に残したい言葉や迫力を意識して映像を作るのが大切」などと説明。児童はメモを取るなどして絵コンテを書いた。

児童は11月ごろまでにCMを完成させ、校内発表会や「ふるさと福井CMコンテスト」で発表する予定。谷口星斗君は「勝山の恐竜を紹介する面白いCMに仕上げ、たくさんの方が勝山を訪れるきっかけをつくりたい」と話していた。

R5.9.17 福井新聞



# ユネスコスクール最優秀賞

学校名 宮城県仙台第三高等学校

担当者名 主幹教諭 渡部 敦

## ～高等学校における地域を学習素材とした探究的な学び～

### 1. はじめに

本校が立地する宮城野区鶴ヶ谷地区は旧仙台市が主体となって開発した市内最古かつ最大規模の団地であり、ピークの昭和 50 年には 2 万人規模の住民が生活をしていました。開学当時は旧市街地郊外であったことから、公的な施設として宮城県関連の施設（消防学校、農業試験場、家畜保健所等）もあったが、その一部が移管され、多くの機関はさらに郊外へと移転している。この歴史ある開発住宅地は高齢化が進み、今では世代交代の結果として新しいまちづくりに舵を切っている。

これまで都市部にある県立高等学校は全県一学区の大学区制だったことや、設置者が県であることから地域との繋がりにも限りがあった。しかしながら、普通科における課題研究のあり方、学習指導要領で示された ESD の考え、合科的な科目の開発、PBL 型授業や探究的な学びの検討などが相まって、本校では再度地域素材の教材化を検討することにした。さらには、今や世界の共通課題である SDGs を意識した活動への発展も視野に入れたカリキュラム・マネジメントをホールスクール・アプローチで行うことにした。

特に ESD/SDGs の観点から、手つかずのまま放置されてきた学校隣接の学校林と、その西側に広がる大堤沼を教育活動の素材として取り入れることを大きなプロジェクトとした。またこれらを取り囲む地域探索を授業に含めることで、GIS(地理情報システム)やアーカイブ・データベースといった新たな学習手法を用いて、地域の歴史と環境を再認識させる学習と繋げることも検討した。

### 2. 実践内容

#### (1) 学校林の整備と教材化

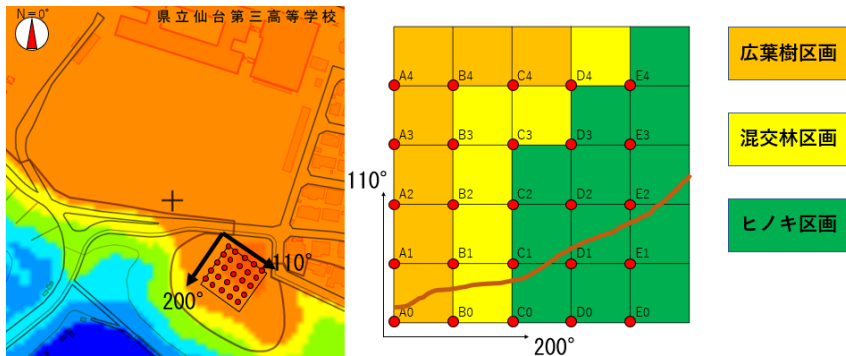
学校の南側に隣接するおよそ 1 ha の学校林を「時習の森」と呼んでいる。「時習の森」は、南西方向に傾斜を持つ標高 62m 程度の丘に広がっている二次林である。この地の歴史は古く、南側法面には平安時代に瓦を焼いていた「安養寺中囲窯跡」があり、この薪としても利用されていたと推測されている。また、江戸時代には伊達家の御狩場や薪炭材の調達の間として利用されていたと言われている。

近現代の記録として、昭和 20 年代後半に一度スギの植林が実施され、昭和 30 年代後半から昭和 40 年代前半にかけて、鶴ヶ谷団地造成に伴い、前述の遺跡調査が実施されている。その際、一度すべての樹木が伐採され、調査終了後に再度ヒノキやスギの針葉樹が植林された。よって、現在の「時習の森」は植林 50～60 年ほど経過しており、日本中に広がっているいわゆる「放置された二次林」の状態であった。

令和 3 年度に業者へ依頼し、立枯れや根返りなどの危険木の撤去を行い、令和 4 年度から、宮城県林業技術総合センター及び仙台地方振興事務所林業振興部林業振興班の指導助言を受け、自然科学部



生徒を中心に 50m コドラート (調査区画) を設置している。コドラート法は、その地域の植生の特徴が最もよく出ている場所を選び、そこに正方形 (コドラート) の枠を設置し、その内側を標本として計測する一般的な植生調査方法である。その結果、大半は植林された後に放置されたままのヒノキ林であることが分かり、さらに北面道路側からは陽樹の落葉広葉樹が侵入してきている混合林であることも判明した。また、本校では 12 年前より「白神フィールドワーク」を実施しているが、ここでは「自然林」に対する 50m コドラート調査を行っている。そこで「自然林」と「放置された二次林」との比較、さらには一部の林に適切な管理を行う「管理された二次林」を造ることで、3つの林の違いを体感し、調査計測することを目的として整備を進めた。



現在、学校林の教材化として

- ①植物観察の授業内フィールドワークとしての活用
- ②植物の同定実験での活用
- ③白神フィールドワークで実施するコドラート法及び毎木調査 (地上高約 1.3m の幹の周囲長が 15cm 以上の幹を対象として、胸高周囲長、種名、位置を記録する調査) の事前実習場所としての活用
- ④課題研究における林業課題の抽出
- ⑤世界・全国の協力校との自然観察林として利用する に至った。

また、散策路を整備することで、鶴ヶ谷近隣の小学生・中学生を対象とした環境学習 (『時習の森』グリーンアドベンチャー) を開催するなど、学校林を活用した地域への還元が実施できている。



図1 授業内フィールドワーク (植物観察調査)



図2 台湾姉妹校と自然観察で交流



図3 小学生との巡検の様子

## (2)大堤沼の整備と教材化

大堤沼は学校の南西側に約 800m の縦長な 3つの堤からなる沼である。学校林から西側にあたる地域である。沼の周辺にはコナラやニセアカシアの植生が見られ紅葉が綺麗である。冬には白鳥や雁の飛来もあり、仙台市街地では珍しい多様な野鳥観察スポットでもある。現在上流域に位置する上堤と中堤の間に小さな公園が整備されているが、小規模であり、地域住民の利用が時々見られる状況である。大堤沼は農業灌水として現在も春先に利用されている。

大堤沼は自然科学分野では水域生態系や野鳥観察を行う地域として、社会科学分野では都市における水辺環境の憩い場整備としての利用が想定された。大堤沼は、近くにある与平沼と共に一時期仙台市による公園化計画が進められたが、周りを囲む 8つの自治会の意見として「自然環境をそのまま残す」意見と「公園化による憩いの場整備」、折衷案としての「一部公園整備化」などの意見に分かれ、整備が進まなかった経緯がある。現在は危険防止のために上堤と下堤はコンクリートやフェンスで覆われ、沼の周りは鬱蒼とした灌木が生い茂り、ゴミの不法投棄も見られ、住民の自助努力だけでは環境整備が困難になっている。

そこで、地域住民の声を拾うとともに、山形大学工学部の佐藤研究室の協力を得て現況をヒアリングし、新たな公園化への提言と、現況を活かした自然観察路の整備について検討することにした。住民の一部への聴き取りにより、公園化で賛否を闘わせた住民も世代交代となり、人の手を入れないと

整備しきれない状況であることは共通認識として持っていることがわかった。

現在、1学年でフィールドワークを実施し、公園としての利活用に関する課題発見に繋げ、2学年では、具体的な整備に関する計画作成と、環境学習の場所として活用している。大堤沼周辺は土砂災害警戒区域にも指定され、隣接する各自治会の要望にも差異がある。環境整備以外にも防災等の複合的な視点や、社会資本のあり方の学習、治水権の問題など、学際的な学びにつながる教材である。これら開発経緯の一環として、第14回ユネスコスクール全国大会/ESD研究大会で代表生徒が公園化計画について発表し、好評を博した。現在、この研究内容を視覚的に分かるように土地模型を作成し、近隣の小学校や中学校等にも広報活動を実施している。このように大堤沼の整備は、幅広い世代が地域の課題に関心を持てる地域振興の役割も果たしている。



図4 佐藤教授との打合せ



図5 地域住民との打合せ



図6 佐藤研究室での発表会

### 3. 成果と課題

本校ではこれまで、ゴミの不法投棄が多発していた学校林や危険で近寄りがたい沼地、いわゆる厄介な存在であった身近な場所をテーマとして取り上げる (think globally, act locally) ことで、多くの知見を得ることができた。当初は環境教育や生物多様性などのESDの基本的な考えに沿った学習環境の開発であったものが、それにとどまらない様々な課題の発見へと発展している。「6つの視点」、「7つの能力・態度」から鑑みた場合、学校林に関しては林業に係る多種多様な労働への思い (批判的に考える力)、30年、50年先を見越した樹木の選定 (未来予想力・計画力)、自然観察林とした場合の安全性とその成果 (多面的・総合的に考える力) などである。大堤沼に関しては、周辺地域住民の多様な価値観 (コミュニケーション力)、自然保護と安全な環境の保全のための責任 (他者と協力、繋がりを尊重)、学校からは見えない遠隔地にある水田のための治水権など課題が複雑である。また、公園化の計画を通してインクルーシブ型公園の成功事例が極端に少ないことに気づき、課題解決の難しさを感じている。

これらは何も本校周辺だけの話ではなく、生徒自身が暮らす地域での課題や近い将来の課題であることに生徒誰しもが気づき、「最適解はない課題」にそれぞれが挑んでいる。机上では学ぶことができない社会課題について、知識にとどまらず、自らが取り組む事業として発展している。

課題としては、ESDで取り組む複雑な課題解決に係る能力の育成を評価するためには、多様な形成的評価が必要と思われる。また、この学習を通じて地域や交流した人々にどのような影響を及ぼしたかを継続的に測定する必要がある。長期的には、地域素材を活用した研究を継続しながら、同様に地域素材を教材としている県外や海外の学校との交流を発展させていく。その中で探究活動における比較検証等の研究実績を積み重ね、広域連携の研究として、その成果を発信していくことを目標とする。

# ESD 優秀賞

気仙沼市立鹿折小学校  
校長 小野寺 裕史

## ～教育活動全体で取り組む「鹿折小ESD」～

### 1. はじめに

本校では、ESDは持続可能な社会の創り手を育てる教育であり、教育全体で行うことを学校全体で確認し、教育活動全体をESDと関連付けてホールスクールアプローチを行っています(図1)。

これは、教育目標の達成を目指す教育活動をSDGsと関連付け、ESDの観点から教育活動をデザインしたものです。この図のように、全ての教育活動をESDの視点で整理し考えることで、持続可能な社会の創り手を育てる学校教育という意識が職員全体で共有されることとなります。



図1 ホールスクールアプローチデザインシート

### 2. 実践内容

#### (1) 本校のESDのねらい

「地域の人と触れ合い、自然・文化・産業に関わりながら、気仙沼への思いや考えを深め、自分の考えを表現し、課題解決に向けて協働して活動することができる持続可能な社会の創り手としての児童の資質・能力の育成を目指す」ことをESDのねらいとしています。

具体的には、鹿折小SDGs 10(図2)を掲げ、教育活動全体で共生・共創社会を実現することができる資質・能力を育てるESDの推進に努めています。

また、本校の教育計画には、図3のように全ての教育活動に重視するSDGsを記載しています。これは、先述のとおり、ESDは教科・領域だけで行うものではなく、学校教育全体で行うべきものと考えたことにつながっています。



図2 鹿折小SDGs 10

#### (2) 全校で取り組む活動

全校の活動では、計画委員会を中心に、ESDを基軸にした「児童会スローガン」(写真1)を設定し、年間を通してスローガンを意識させています。また、縦割り挨拶運動や季節毎の栽培活動、JRC委員会を中心とした「ありがとう運動」(写真2)や募金活動(写真3)など、他者意識を育て、感謝の気持ちを醸成します。

2 学芸文化的行事		(2) 学芸会実施計画	
目指す児童像	アクションプラン	①	④
かしこく (知)	I-1 学力向上	I-1	自分たちの演技を通して、お客さんにどんなメッセージを伝えたいかを考えて取り組む。
なかく (共)	II-1 心を磨く	II-1	[E]友達と協力して、学年の演技を創り上げる。
	III-2 夢や志	III-2	自分たちの演技とSDGsとの関連を理解し、喜んで表現活動に取り組む。
			③ 指導時間について、留意事項を通知、全学年の演技をアーカイブで配信することを追記(感染症対策)。
1 目標			
(1) 児童の自主的、創造的な学習成果を総合的に発表させることによって、生活を豊かにさせる。また、この活動を通して表現の楽しさや喜びを味わい、責任、協力、その他望ましい生活態度を育てる。			
(2) 事前の指導及び活動を通して、演技や鑑賞の正しい態度を育てる。			
(3) 事前から事後までの指導と活動を通して、楽しく進捗の豊かな学級校風を築く。			
2 指導の方針			
(1) 日常の学習成果の積み重ねという考えから、教科の指導や海と生きる探究活動と深い関連をもたせ、内容や方法を決定する。効果的に練習を進めるために、夏休みに演技種目を決定する。演目は、SDGsとの関連や児童の実態を十分に考慮するとともに、全学年のバランスを見て調			

図3 教育計画の記載



写真1 児童会スローガン



写真2 ありがとう運動の掲示



写真3 募金活動の様子

### (3) 「海と生きる探究活動」による探究学習

本校は令和2年度から文部科学省の教育課程特例校の指定を受け、特設領域「海と生きる探究活動」を設けています。「海と生きる」とは、気仙沼市の震災復興スローガンです。気仙沼の人々にとって海は、過去と現在、そして、未来をつなぐ存在であり、持続可能な未来社会を考えるための一番のよりどころです。また、この学習は、海洋教育を軸としており、持続可能な社会の創り手としての資質・能力を育てます。

「海と生きる探究活動」は、3年生以上の学習として

編成していますが、低学年から生活科の中で海洋リテラシー（後述）の育成につながる学習を計画的には進め、6年間の学習という大きな流れをもった探究的な学習です（図4）。具体的な活動は以下のとおりです（写真4～18）。

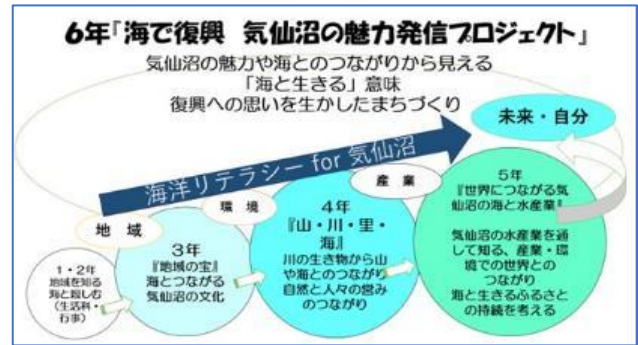


図4 鹿折小探究学習の流れ



写真4 浜辺で砂遊びを行う様子（1年）

## 海に親しむ



写真5 体験から海の生き物を制作した作品（1、2年）



写真6 罝遊びをして生き物を捕まえる様子（2年）

## 海と生きるまちの文化・歴史



写真7 地域に伝わる気仙沼凧をつくる様子（3年）



写真8 地域の伝統芸能を教わる様子（3年）



写真9 地域のワカメ養殖について教えてもらう様子（3年）

## 海と川と山,そして人とのつながり



写真10 鹿折川の調査の様子（4年）



写真11 森を調査する様子（4年）



写真12 キリバス共和国との交流の様子（4年）

# 海と生きるまちの産業の魅力と課題



写真13 マグロ漁船見学の様子 (5年)



写真14 加工工場見学の様子 (5年)



写真15 オンラインによる交流会参加の様子 (5年)

## 気仙沼の魅力を生かした未来のまちづくり



写真16 地元食材を生かした弁当を試食する様子 (6年)



写真17 教授から講話を聞く様子 (6年)



写真18 オンラインによる交流会参加の様子 (6年)

### 3. 海洋リテラシーfor 気仙沼

海洋教育では、海洋リテラシーを具体的に示し、人材育成を行っています。気仙沼市では、上記リテラシーと市の特色を取り入れ、2021年に「海洋リテラシーfor 気仙沼」として示しました。気仙沼市の海洋リテラシーは「海と生きる文化を重ね伝える」と「海と生きるまちをつくる」に特色があり、文化や歴史の理解と尊重、暮らしや産業の理解と発展、困難な状況を克服する生き方やまちづくりへの考え方がより大切にされています。本校では、国立教育政策研究所が示す「持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な7つの能力・態度」の育成も含め、図6の姿を目指すこととしています。

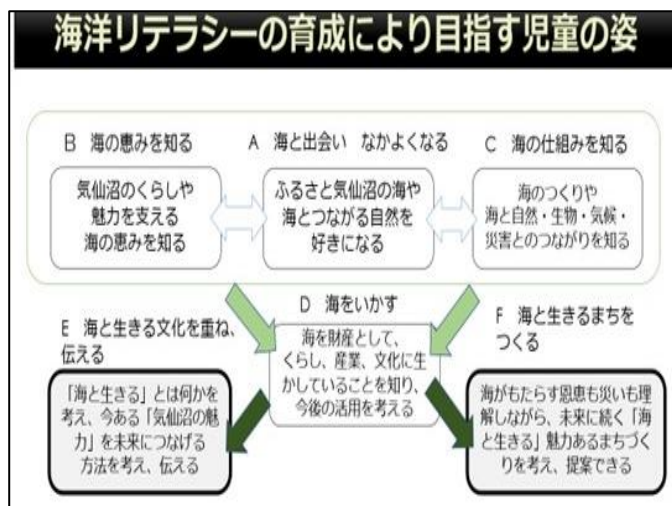


図6 海洋リテラシーの育成により目指す児童の姿

### 4. おわりに

実践の結果、以下の児童の変容が見られました。

- ・自ら「問い」をもち、主体的に学びに向かう姿が見られるようになった。特に、貧困国や災害地域へ向けて募金活動を行ったり、給食の残食を減少させる活動に取り組んだり、自分たちにできることを周囲に呼び掛けながら協働で取り組む児童が増加した。
- ・本校ESDで特に重視する「自立・責任」「調和・協働」「志・創造」について、児童の日常の様子や学習への取組などから児童の意識と行動に大きな変容が見られるようになった。教師が、重視する価値を意識して日々指導していることが児童の変容につながったと考える。
- ・実践を重ねていくことで、教員内に「新たなことに取り組んでいる」という意識が減り、これまでの教育活動を別な視点で見直しているという意識に変容しつつあるということを感じている。

上記の成果が得られましたが、校内研究等で、児童が意欲を持続し探究活動を行うためには、「問い」の質が重要であることを、校内で確認しました。今後も、児童の興味・関心に基づく、内面からの問いを持たせるように学習活動の工夫を行っていくことや、児童の視点に立ったカリキュラムの改善を行うこと、協力可能な地域企業や大学等の専門機関などのネットワーク体制の充実に努めていきたいと考えます。そして、さらなる「鹿折小ESD」の発展に努力していきたいと思ひます。

SDG s の達成に向けた ESD の実践

～「ストーリー」と「ネットワーク」で紡ぐ ESD～

1 はじめに

本校は、平成 22 年に県内の小・中学校唯一のユネスコスクールに認定され、ESD の視点を取り入れた教育活動を展開してきた。平成 27 年度からは、大学や海外のユネスコスクール等との交流にも取り組み、更なる深化・充実を図っているところである。本校では、「持続可能な社会の創り手となるための資質・能力」の育成を最上位目標としている。その具現化のために「SDG s の達成に向けた ESD の実践による『生きる力』の育成」を学校経営の重点とし、「持続可能な社会に向けた人づくり」に取り組んでいる。目標達成のための手段として、総合的な学習の時間を ESD 実践の軸とし、各教科等との連携を図った教科横断的なカリキュラムを実施している。本校の総合的な学習の時間の柱は、「食育」「エネルギー教育」「国際理解教育」であるが、SDG s 17 の目標相互のつながりも踏まえてカリキュラムを構築し、体験を通して「社会的実践力」を育むことで、「生きる力」の育成に資することを目指している。

本校では、ESD を推進するためには、「子どもの学びの『ストーリー』をつくることが重要」と考え、3 年間のつながりを踏まえて、子どもの自身の「ストーリー」を、当事者意識をもって展開できるように支援してきた。また、「教育は学校内で完結することは不可能である」という共通認識の下、外部機関との連携が極めて重要であると考え、NPO 法人や企業等との「ネットワーク」を構築して実践してきた。これらをベースとして、教育活動全体を ESD の視点で捉え、「人」「教材」「能力・態度」のつながりを踏まえた探究的な学びを展開している。

2 実践内容

本校の教育目標は「自律 貢献 ～夢大きく 協働的に探究し 誰一人取り残さない社会をつくる～」である。教育目標達成のための手段としての ESD 実践は、総合的な学習の時間を軸とし、「ESD カレンダー」と「ESD ストーリーマップ」に体系化して位置付け、学校全体で計画的に実施している。普段の学習活動で「ESD で身に付けた力（資質・能力）」を育て、それらを生活の中で活用できるようにすることで、持続可能な社会の創り手を育てることをねらいとしている。

(1) ESD の目標

本校では、ESD の目標を「E：教育（以下「E」）」と「SD：持続可能な開発（以下「SD」）」に分けて設定している。

「E」の目標については、「大曲南中 ESD『学習で身に付けたい力』」として、次の 6 項目を挙げている。

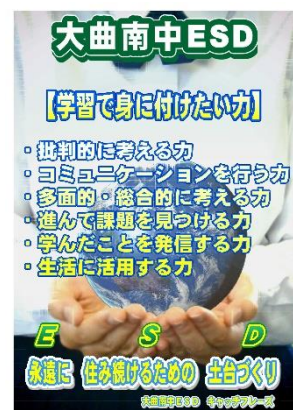
- ・批判的に考える力
- ・コミュニケーションを行う力
- ・多面的・総合的に考える力
- ・進んで課題を見つける力
- ・学んだことを発信する力
- ・生活に活用する力

その目標は右のようなポスターにして、各教室等に掲示している。

令和 5 年度 大曲南中学校グランドデザイン



学校経営グランドデザイン



また、「SD」の目標については、「持続可能な開発について考え実践する力」として、次の4項目を挙げている。

- ・SDGsに関する知識・技能
- ・SDGs達成に向かう意欲
- ・課題解決方法の考察
- ・行動変容、実践力

以上のような目標の下、ホールスクールアプローチでESDに取り組んでいる。

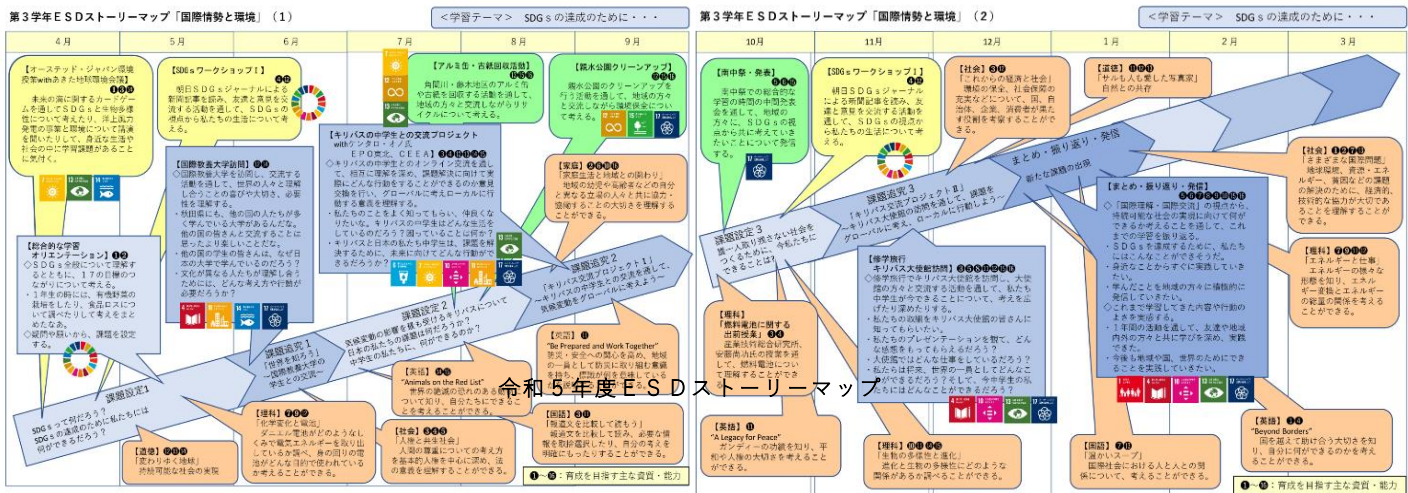
## (2) ESDのカリキュラム・マネジメント

目標の達成のための手段であるカリキュラムの実行は、教科だけ、総合だけ、学年だけといった「単線型の並列」では十分に効果を発揮しないと考える。教科等の内容や育てたい資質・能力のつながりを踏まえてカリキュラムを構築するとともに、学校の外への力も巻き込むことでさらに大きな効果が得られると考える。まさにカリキュラム・マネジメントが重要となる。

そこで本校では、ホールスクールでESDを実践できるようにするため、次のような「ESDカレンダー」と「ESDストーリーマップ」を作成した。

右は、ESDカレンダーである。前述の「学習で身に付けたい力」を、各教科等の内容に位置付け、色分けして示している。また、本校の3本柱である「食」「エネルギー」「国際理解」との関わりも示している。国立教育政策研究所が示している「3つのつながり」のうち、「能力・態度のつながり」が一目で分かるように表している。下は、ESDストーリーマップである。

令和5年度ESDカレンダー



(ESDカレンダー、ストーリーマップ、取組等は、本校HP <http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~om-minamityu/> に掲載)

ESDストーリーマップには、総合的な学習の時間の探究的な学習の流れを軸として、そこに各教科等の学習内容がどのように関わってくるのかを示し、「教材のつながり」を表している。また、外部とのつながりも示すことで、外部リソースを有効に活用した、「人のつながり」も表している。

## (3) 具体的な取組

①1年生のプログラム 1年生の前半は「食」でストーリーを展開した。給食由来の肥料を用いて、JAの指導を仰ぎながらの野菜栽培。その後、大曲農業高等学校博士号教員大沼克彦氏による有機肥料の出前授業。さらに、栽培した野菜を使つての省エネクッキング。そして、一連の学習を通して見出した「食品ロス問題」を課題とし、フードバンクやスーパーを訪問するなどして、「食」に関する課題探究を進めた。



給食由来の有機肥料で野菜栽培



1年生の後半は、住居についてのプログラムを実施した。ストーリーは『過去』→『現在』→『未来』の時系列の展開である。初めは、家庭科の住居の学習で、国登録有形文化財「旧本郷家住宅」を訪れ、地元の一級建築士松塚智宏氏の解説のもと、昔と今の家をエネルギーの視点で比較した（過去の家）。

次に、積水ハウスの出前講座「いえエコロジーセミナー」を実施し、今の家の断熱について実験を通して学んだ（現在の家）。最後に、再び松塚氏の指導で「未来のエコハウスを設計しよう」という課題に取り組んだ（未来の家）。生徒は、多角的にSDG sを学び、2年生のストーリーにつなげた。



エコハウスを設計しよう

### ②2年生のプログラム

2年生は「エネルギー」でストーリーを展開した。オーステッド・ジャパンによる、洋上風力発電のVR体験をした後、実際の風力・太陽光発電所等の再生可能エネルギー施設を見学した。その後、未来のためのESDデザイン研究所高橋敬子氏を招いての、気候変動ミステリー授業に取り組んだ。さらには、修学旅行でオーステッド・ジャパン社を訪問し、自分たちが学習したことをプレゼンするとともに、洋上風力発電を詳しく学んだ。



気候変動ミステリー授業

理科の授業では、東北電力の様々な発電に関する出前講座や、産業技術総合研究所安藤尚功氏による燃料電池講座を実施し、エネルギーについて学びを深めた。

最後は、前年からお世話になっている松塚氏の指導で、前年実施の「エコハウスを設計しよう」からつながる「エコシティーを設計しよう」という授業でまとめ、SDG s 17の目標のつながりや達成の意義を自分事として捉えた。



エコシティーを設計しよう

### ②3年生のプログラム

3年生は「国際理解」でストーリーを展開した。初めに、国際教養大学の留学生と、海外のSDG sへの取組や人々の考え方について意見交流を行った。次に、日本キリバス協会のケンタロ・オノ氏をファシリテーターとして、キリバスの中学生とのオンライン交流を行った。気候変動の影響をいち早く受け、国土が海中に沈んでしまうという深刻な状況であるキリバスの同年代の子どもたちとの交流を通して、気候変動をより切実に感じ、自分たちは何ができるのかを考え提案した。さらに、修学旅行では、オーステッド・ジャパンの本社がある環境先進国のデンマーク大使館を訪問し、自分たちの取組をプレゼンするとともに、デンマークの環境対策について学んだ。このような学びを通して、『誰一人取り残さない』未来、世界の人たちが幸せになれる未来を目指したい。」と強く思うとともに、グローバルな視点で世界の出来事を捉え、当事者意識をもってSDG sの達成に向けて行動しようとする意識を高めた。



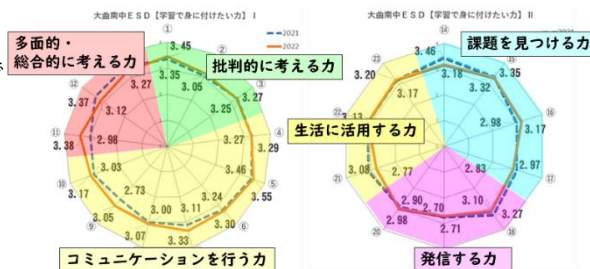
キリバスの中学生とのオンライン交流

## 3 成果と課題

右のグラフは、本校が掲げる「E」の目標である「大曲南中ESD『学習で身に付けたい力』」についてのアンケート結果を表したものである。1年間の学びの振り返りであり、自己評価である。これまでの取組によって、本校が目指してきた「E」の目標が、十分達成できていることが見て取れる。

また、右の文章は、キリバス交流を終えた後の3年生の振り返りである。学習を通して、SDG sの達成に向けて「世界」を意識し、自分がやらなければならないという当事者意識が芽生えている。これら生徒の感想等の文章も、振り返りの記述であるとともに、記述した本人の自己評価そのものでもある。さらに、感想発表やプレゼン等から相互評価することも進めてきた。「SD」の目標達成が、意識変容と行動変容となって表れていることが見て取れる。

課題としては、ESDストーリーマップを完成させたことで、教育目標の具現化のためのESD実践に一本の軸ができ、方向性と連続性を確立することができた反面、ストーリーの完成を生徒に委ね、自らの意思と熱意で学びを進めるさせることまでには至らなかったことである。教師のファシリテーターとしての技量向上も課題である。SDG sの認知度が高まってきている現在、社会に開かれた教育課程の実施と、これまで培ってきたネットワークの活用により、地域のESDフロントランナーとなるべく実践を続けたい。



大曲南中 ESD「学習で身に付けたい力」の評価

気候変動の問題は大きすぎて、子どもの私たちにできることは少ないです。でも、年齢や地位、人種、言葉の壁を壊してしまえば、たくさんの方の知恵が1つになって解決の道へとつながっていきます。そうすれば、国や島、生きものだけでなく、地球や「未来」まで救えるのです。そういうことを世界に広める人間として生きていきたいです。

私たちが平等に、平和に活躍できる笑顔あふれる未来を創るのは私たち自身です。周囲の人たちだけでなく世界に発信することの素晴らしさを学ぶことができました。これから一緒に世界中のみんなが幸せになれる未来を創りましょう。

# ESD 優秀賞

浜松開誠館中学校高等学校

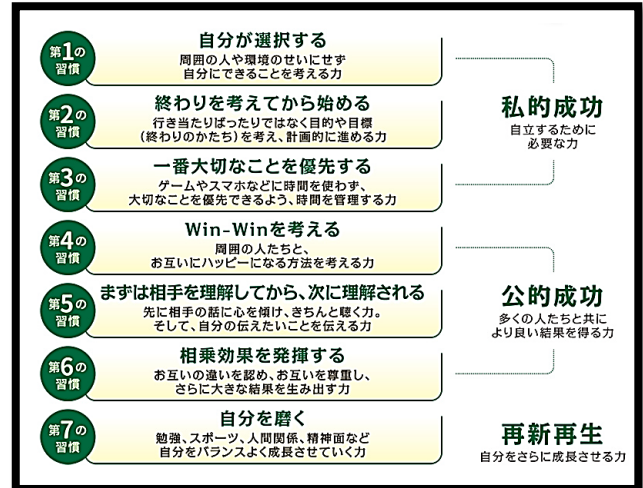
校長 高橋 千広

教諭 影山晶一朗

## ～浜松開誠館中学校高等学校ユネスコスクール実践活動～

### 1. はじめに

本校は、「誠心敬愛」の校訓のもと、自立的学習者として、多様化する進路に対応できる「徳育教育」に力を注いでいます。具体的には、中学校では〈K-compass®〉プログラムを、高等学校では〈7つの習慣J®〉プログラムを導入し、「夢力・人間力」の育成を図っています。



また、探究を通じた SDGs の

学びの実践として、社会課題の解決に向け生徒が主体となった取り組みに活動を広げています。グローバル教育環境として、教員免許状を持つネイティブ教師の充実、中学でのグローバルマインド、姿勢・価値観の育成、高校での実践的な学びを活かす場等の教育環境の整備により、一層グローバル社会で活躍する人材・地球市民の育成を目指しています。

### 2. 実践内容

#### (1) 気候マーチ

- 2019年、探究授業の中で SDGs の取り組みの具体的な方策の一つとして、気候危機の現状を知った生徒の中から、具体的に自分たちにできることはないかと立ち上がった生徒が全校に呼びかけ、第一回マーチには400人が集った。市内街頭を行進し、最後に市役所前にて、浜松市長に私たち生徒の、大人だけに私たちの未来の気候対策を任せられない、などの思いを込めた提言書を提出した。
- 続くオンライン気候マーチは、当時の小泉元環境大臣とのオンライン対談時にコロナ禍におけるマーチのあり方として提案され、これを受ける形で、全校で実施した。
- 以降、毎年生徒から生徒へ、世代を超えて環境、気候危機の思いは引き継がれた。この活動は環境白書に取り上げられ、小泉元環境大臣が注目していただき、応援メッセージをくださった。
- 後に、小泉元環境大臣は、実際に本校を訪れ、全校生徒にこの活動を後押しする熱い思いを語られた。代表生徒と小泉元環境大臣との座談会を通して、本校生徒たちはより一層この活動を継続することの意義を深く理解した。



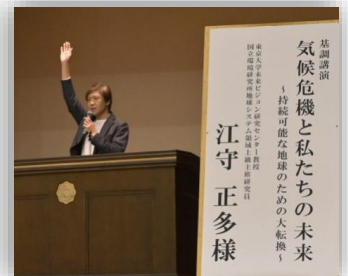
## (2) STOP 温暖化若者会議

- ①第一回気候マーチの市長への提言により、Z世代の意見交換の場、STOP 温暖化若者会議が実現した。本年度も浜松市地域情報センターにて第4回STOP 温暖化若者会議2023が開催された。浜松市内の学校や団体が集まり、午前の部では各学校の活動発表と環境省の方の講義を聞いた。午後の部では、ディスカッションや交流会を行った。本会議開催に当たり、各校から代表生徒を募り、4ヶ月間運営委員会を開催して生徒同士が準備をしてきた。
- ②他校の取り組みを聞く中で、「他校の考えなどを学び取り入れたい」、「自校での活動をさらに飛躍させたい」など、とても意欲的な姿勢がみられた。グループディスカッションでは、各校の生徒が一緒になってグループをつくり、「プラスチックごみについて」「脱炭素について」「生物の絶滅について」のいずれかのテーマについて自由討論を行い、発表した。



## (3) 環境シンポジウム・気候サミット

- ①本年度、教育における環境問題のあり方を考え、実績を共有することを目的とした「気候変動から未来を守るシンポジウム」を開催、江守正多先生による基調講演をはじめ、パネルディスカッション等を行った。
- ②午後の部では、「第3回小中高全世界気候サミット」を開催、日本だけでなく、モンゴル、ニュージーランド、オーストラリア、モザンビークから多くの児童生徒、気候変動の活動家の方々が参加し意見交換を行った。元五輪選手で現在エコアスリートとして活動しているリディアン・カウリーさんや元競泳選手アトランタ五輪入賞、元国連職員の井本直歩子さんらが気候変動対策について生徒たちにアドバイスを行った。



## (4) フェアトレード推進

- ①SDGsの取り組みの具体的な方策の一つとして、探究授業を通して生徒たちがフェアトレードに着目。有識者、活動家の助言を得てより一層理解を深め、東京ガールズコレクション2019、本校文化祭、浜松地区フェアトレードマーケット、異文化共生をテーマとしたイベントなどにブース出展。
- ②ペルーの社会的立場の弱い生産者、ブラジルのオーガニック生産に取り組む農家等をはじめとし、児童労働、環境に配慮した農業、女性の社会進出などの課題解決に寄与する取り組みとして活動拡大を目指している。

③更に、本校オリジナルブレンドのフェアトレードコーヒーを企業と協働開発。フェアトレードをより広く知ってもらい、活動に参加してもらうことを目的としている。

④こうした活動は、地域の小学校、中学校への、生徒による出張授業の際、紹介をさせて頂いている。



### 3. 成果と課題

諸活動、教育環境により、本校生徒の変化として、自分たちにできる水準の高さを認識し、リーダーシップをもって校外でSDGs 諸課題を同世代に共有しようという自覚を強めてきた。他者（NPO、活動家、教育者等）が提示する社会参画企画のみならず、生理の貧困、被災地支援、女性の社会進出、オーガニック農業の認知と推進、廃プラスチックアップサイクル等への参加を校外で仲間を募り、提案、アクションにつなげる行動がみられるようになった。

マインドセットを有する生徒へのファシリテーションを一層強化し、行政、教育、地方創生、気候危機課題解決へ寄与するアクションを実際にとるグローバル人材の素地を育成し、こうした生徒層を多く社会へ排出していきたい。

# ESD 精励賞

学校名 社会福祉法人心耕福祉会

ひかりの森こども園

屋敷 和久

## ～園生活から始まる循環探し～

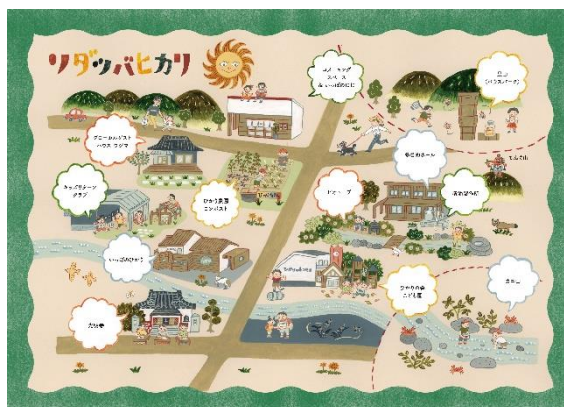
### 1. はじめに

当法人の所在地、宮崎県の三股町は 25,000 人の人口減が始まっていない地方都市では珍しい、若者世代が元気な街である。賃貸住宅大手メーカーのランキングでは、九州内において、街の幸福度ランキング 1 位、街の住みごちランキングでも 1 位の子育てにやさしい町となっているが、徐々に人口減の兆しを感じられつつある状況である。

教育分野では、教育長のリーダーシップにより、前教育長からいっておられる、生徒に対する個別最適化を目指しており、絶賛実行中である。

当法人も、国の定める保育指針にもある個別対応のかかわりに重点を置きながら、園児が自ら決め実行できる機会、環境、大人との関わり等で質の高い保育を目指しており、法人の体制は、こども園を中心に、児童発達支援事業所、放課後等デイサービス、学童保育を運営している。(総称 ソダツバヒカリ)

また、地域活動も活発であり、法人の施設等を利用していただき、三股町社会福祉協議会(コミュニティデザインラボ)、ボランティアチームなどと協働し、こども食堂(りんりん食堂)、貧困世帯学習支援(森の子学習塾)、夜学校(多世代生涯学習)、昼学校(フリースクール)、カフェ事業(コマーススペース)、寺子屋(光明寺)などの地域活動が実施されている。



#### 地域活動

ビオトープ(貧困世帯学修支援)  
光明寺(こども食堂)  
学童施設(生涯学習)  
カフェ(シルバー世代雇用)  
などなど

### 2. 実践内容

#### (1) コンポスト

当園が実践しているコンポスト活動は、家庭からの野菜くず(年間 5250 キロ)と園の給食での野菜くず(年間 250 キロ)をたい肥にするといういたってシンプルなものである。そのシンプルな取り組みをいかに園児らとともに生活の中に取り入れ、興味関心のもとでの遊びの延長としての学びの活動にしたいという取り組みである。

コンポスト活動からの学びとして、野菜くずの重さをはかるという点での数字への関心の扉、米ぬか、鶏糞を混ぜ合わせ、発酵することでの温度の変化に気づき、形あるものが変化していく様の観察する学びの心を育むという点を重要視している。



※ 野菜くずの計量と記録



※ 孵化しなかった卵の解剖

## (2) ニワトリ飼育

上記に挙げたように活動には鶏糞を利用している。園児らは鶏糞の関心から鶏への生態への興味へと発展していくこととなった。そこから、産んだ卵をふ卵器で温め、孵化する状況も観察することができ、図鑑で生態を学び、お世話する段階へと進んでいった。市販のエサや草をヒヨコ用にすりつぶし与えたり、体温調整ができないため、保温箱を作成し、箱内の掃除、水やりと様々にお手伝いをしてくれ、より生き物への関心、命への関心が深まったように感じた。

すべてが成功事例となるわけでもなく、温度管理の失敗から死なせてしまうこともあり、お墓を作り、手を合わせ供養する姿が見られ、ゲームでは感じることでできない命の儚さ、尊さを知る大切な学びへとも発展した。ある園児は、祖父と飼育するということに家庭を持ちかえり、飼育生活が始まったこともあり、子どもの関心に大人も巻き込まれるという少しの迷惑と小さな学びの始まりとなっている。

## (3) 稲作

コンポストの発酵には鶏糞と同様に米ぬかがポイントとなる。園では年間80俵のもみ米を消費している。もみ米で購入し、備蓄しているため、精米が必要となる。精米は園でできるため、日常的に園児らも精米の手伝いにも興味を示してくれている。もみ米は、米ぬかともみ殻に分けられ、もみ殻は鶏の寝床や、防草のために花壇に敷き詰めたりして活用している。ヌカは定期的にコンポストに混ぜこみ発酵の源となっている。自分達が食べる米への関心が高まる子供たちで、泥んこ遊びからの田おこし、田植え、草取り管理、稲刈り、脱穀、一連の過程を経て、ヌカができるところまで一年をかけて経験することができた。



野菜くず、ヌカ、鶏糞の攪拌



宮崎日日新聞掲載

### 3. 成果と課題

幼児教育と義務教育の関連性は、様々な共通用語はある中で、「主体的、対話的で深い学び」（アクティブラーニング）がこれから中心となる学び方であるでしょう。

シンプルなコンポスト活動が、科学的な視点、生き物の命、生態にまで関心を持ち、関わりたいという意味、また、失敗というものにとらわれずやってみるという意味が見られ、アクティブラーニングの扉は開けることができたと感じている。

課題としては、本当に主体的であったか、対話的になっていたかという点になる。大きな道筋は大人側で用意しており、園児らの気づきや発見を汲み取ってはいたが、来年度に向け、幼児期だからこそ、話し合いからの発展、理解、自らの探求心にまで大人が理解と関心を持ち、共に学び続ける姿を見せることが大切になると考えている。

# ESD 精励賞

東海大学付属大阪仰星高等学校中等部

教諭 山崎 智代

～SDGs をテーマとした課題解決プログラム「10 年後、戻りたくなる枚方のまち」～

## 1. はじめに

本校は、1983 年に大阪府枚方市に設立された東海大学付属仰星高等学校の中等部として 1996 年に開校し、今年で 28 年目となる。東海大学創立者の松前重義は、明日の歴史を担う強い使命感と豊かな人間性をもった人材を育てることにより「調和のとれた文明社会を建設する」という理想を高く掲げ、「身体を鍛え、知能を磨くと共に、人間・社会・自然・歴史・世界などに対する幅広い視野をもって、一人ひとりが人生の基盤となる思想を培う」という「建学の精神」を示した。本校ではこの精神に基づき、多様で変化の激しい社会において必要なバランスの取れた資質・能力を育む教育を実践している。また、そうした社会において求められる能力を本校では「TG10Cs」(Team Gyosei 10 Competencies: 仰星で身に付ける 10 の力)として以下のよう

知識 技能	①基礎的知識・学力	思想	将来のために必要な確かな知識や学力を身につけ活用する力
	②感じる力・基礎的な体力	体軀	様々なものに心を動かすとともに、健全な心と身体をつくる力
	③社会を知る力	思想	世の中の動きを知り、よりよい未来をつくるためには何が必要かを考える力
思考力 判断力 表現力	④様々な角度から考える力	智能	あらゆるものごとを事実にもとづいて様々な角度から考える力
	⑤自分自身をコントロールする力	智能	自分や自分のまわりの状況を広く見渡し、目標達成のために計画的に行動する力
	⑥コミュニケーション力	智能	人の考えをよく聞きつつ自分の考えをきちんと表現し、まわりの人とよい関係をきずく力
	⑦自分を表現する力	智能	学んだ知識や情報を使って、自分自身を工夫して表現する力
学びに 向かう 力 人間性	⑧チームワーク力	希望	個人の役割を理解し、チームとして責任感を持って行動する力
	⑨やりぬく力	希望	自分の目標に向けて、最後までねばり強く取り組む力
	⑩課題を解決する力	希望	自分のかかえる様々な課題を解決するために計画を立てて実行できる力

持続可能な社会づくりの担い手を育むことを目的とする ESD 教育はまさしく創立者が理想とした人材育成・教育を具現化するものである。本校では SDGs を軸に課題を発見し、教科学習と学外活動をリンクさせ課題解決に繋ぐことをねらいとする。また異世代・地域間交流での「気づき」を学びへ反映させることを重視した教育活動を 2020 年度より行っている。

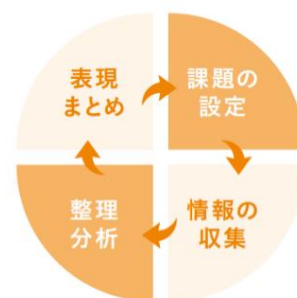
## 2. 実践内容

本校の実践は「探究サイクル」を基本としている。まず SDGs の観点から身の回りにある課題を見つけ、課題解決方法を考え、課題を仮設定する。そして校外学習・講演会など専門家からのアドバイス等情報収集に繋がる体験を豊富に取り入れた後、校外活動に臨む。活動での「気づき」から、異世代の人々との交流を通して見識を広げることが重視している。学びのまとめは「学外への発信」によって行う。新たな意見や感想等フィードバックを基に、更に高次の探究サイクルへの発展へと繋げていく。

こうした「探究サイクル」の過程で、課題設定・情報収集・情報分析を何度も行き来して思考の更新を行うことで、設定課題の質を向上させている。また「育てたい専門スキル」を設定し、将来社会で役立つ思考整理ツール（シンキングツール）の利用方法やプレゼンテーションする上でのスライドや資料の作成法を身に付けることも目指す。

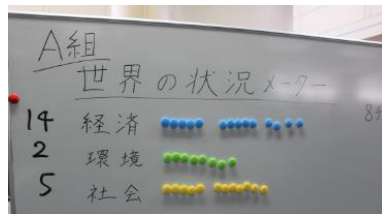
### (1) 1 年生の取組 —SDGs を知る—

外部企業との提携による講演会・SDGs カードゲームにより、より良い世界・国・地域をつかっていくために、経済・環境・社会のバランスを考慮する必要性を学ぶ。





その後、観光や地域活性化をテーマとした地域探究に取り組む。観光に関連するビッグデータ「観光予報 DS(DataScience)」を活用して地域の魅力や課題を客観的に把握、未来に向けた課題やアイデアをまとめて発表する協働型探究プログラムを実施した。学年発表会では「その地域の観光大使として街をPRし、観光客に来てもらうにはどうしたらよいか」をテーマに各グループがそれぞれの地域の観光大使になりきり、発表を行った。



## (2) 2年生の取組—SDGsを身近な問題として捉える—

SDGs実践地域である鹿児島県大崎町を訪問、枚方市と大崎町の抱える問題点や取り組みを比較するという取組を行った。

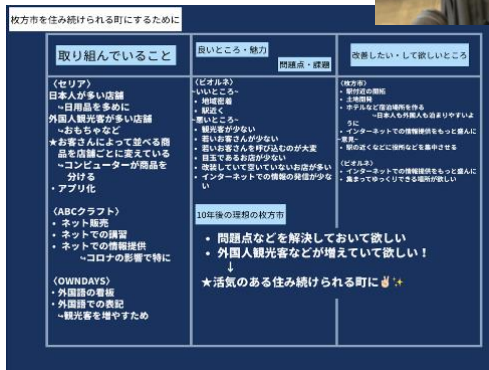
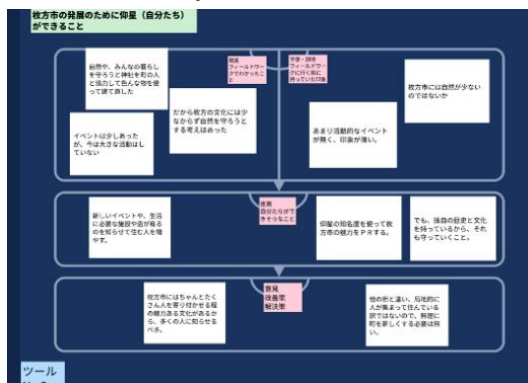
### ①研修旅行先・枚方市との比較（情報収集）

現地訪問前にシンキングツールを用いて両地域の比較から得られた情報を整理、自分たちなりに問題点を洗い出す。現地・鹿児島県大崎町ではごみ処理施設を見学した。ゴミ分別体験から生徒自身が得た「気づき」を基に枚方市と再度比較。他の街との比較によって、地元枚方市の課題や魅力を再発見することにつながった。



### ②枚方フィールドワーク（課題設定・情報収集）

鹿児島県大崎町での経験を踏まえ、枚方市地域発展プロジェクト「10年後、戻りたくなる枚方のまち」に着手した。地元である枚方市をより良いまちにするためのアイデアを考案し、地元の人々に発表するこのプロジェクトは生徒にとって2年間で積み上げてきた活動の集大成となった。フィールドワークのインタビュー活動場所は大型ショッピングモール（ビオルネ）、京阪百貨店、京街道枚方宿商店街、意賀美神社など多岐にわたる。少人数チームに分かれて地元の人々にインタビュー調査を行い、得られた街の声を「探究サイクル」に基づき整理、各チームがポスターにアイデアをまとめる。



### ③ポスターセッション（情報分析・まとめ）



ポスターセッションには地域連携関係機関（ビオルネ、京阪百貨店、京街道枚方宿商店街、枚方宿地区まちづくり協議会、ハローワーク枚方等）をはじめ、東海大学教養学部教授、本校中等部1年生、中等部保護者、一般来場者など約200名の来場があった。優秀チームには表彰式で各賞（ビオルネ社長賞、京阪百貨店賞、呼人堂賞、塩熊商店賞、枚方宿地区くらわんか五六市賞、校長賞）が授与された。

発表会で示されたアイデアのうち、実現案について地域機関・東海大学教授・本校教員で協議した結果、以下3案が採用となった。

- ①ポストコロナで不要になったアクリル板パーテーションの再利用
- ②枚方宿五六市（京街道枚方宿商店街で実施される地域活性化イベント）「仰星市」を出店
- ③大型ショッピングモールで実施される防災フェスタへの参加

### （3）3年生の取組 ー行動変容へと繋げる SDGs 実現プログラムー

#### ①海外との比較（情報収集）



生徒たちの試案をもとに、ハワイ研修にて「現地のアクリル板再利用状況」「災害対策」「現地マーケットの様子」をテーマに街の人々にインタビュー調査を実施した。海外の人々の考えや視点に基づく調査は生徒たちの視野を大いに広げる結果となった。インタビュー内容の情報整理を行い、それらをスライドにまとめてハワイの人々を前に英語で発表した。拙い英語ながら質疑応答にも臨機応変に対応することができた。生徒たちにとって英語による発信にも自信を持てる機会となった。

#### ②発表会ーアイデアコンペ（情報分析・まとめ）

- ・アクリル板再利用アイデアは中学生の自分たちにできることと、現実性を考慮し「写真立て」に決定。アクリル板をフォトフレームの形状に裁断・洗浄した後、クリスマスを意識して草木や松ぼっくり等、自然のものを利用した装飾を施し、製品として仕上げた。
- ・防災フェスタでは「非常食の食べ比べイベント」案が大型店舗担当者との協議により具現化に向かっている。



#### ③地域連携でアイデア実現（まとめ）

大型店舗にて「オリジナル写真立て製作ワークショップ」「非常食の食べ比べとレシピ紹介」イベントを開催。

#### ④啓発メッセージ動画・文集の作成・公開

一昨年度は各班が実現アイデアの内容を説明する動画を作成、SDGs 実現プログラム校内完成披露として中高全校生徒・教員に視聴された。本年度は各班が実現アイデアへの取り組みを卒業文集『星の子』に綴り、全校生徒に配布する。



## 3. 成果と課題

### （1）学校外交流の広がり

学校外交流には教育内容・方法において大きな可能性と効果があるが、教員にとって学内生徒以外の「他者」の存在を前提とした活動の運用は簡単ではなく、効果があるとわかっているにもかかわらず実施が難しい現状がある。しかし本校では「SDGsをテーマとした課題解決プログラム」「探究サイクル」の5年に亘る実践により地域活性プロジェクトへの参画に繋がり、以下のような「場」が得られたことが大きな成果となった。

#### ①直接市民の意見や声を聞ける「場」

市民の声によって生徒たちのアイデアがより現実的なものに進化した点は大きい。ポスターセッションで「よく考えられたアイデアですね」「枚方のために考えてくれていて嬉しい」といった市民の声が生徒たちに自己有用感をもたらし、思考がより整理され、地に足のついた発想ができるようになった。教室内・同年齢の閉じられた交流では得られない教育効果があった。

#### ②異文化交流の「場」

地元商店の人々など「地域の大人」、ハワイのインタビューで出会った「他国の大人」、ワークショップに来場してくれた「地域の子ども」というように、異世代・異地域すなわち異文化との交流によって、本校生徒の視野が大きく広がったことが成果である。相手の土地の文化に接し、その土地特有の日常習慣に気づき、顧みて自分の土地の特色に気づくことができる。情報は手元で簡単に手に入り、知見は尋ねれば得られるこの時代に「調べること」以上に重要なのが「伝えること」である。相手に興味を持ってもらおうと伝えることが生徒の自己肯定感につながり、さらに知りたい・伝えたいという気持ちと表現の向上につながっている。

#### ③地元学校との交流の「場」

今回の受賞を契機に先般「GIGA フェス 2023 in ひらかた万博」への参加依頼を頂いた。このイベントは

枚方市の特色ある学校の取組を子どもが主体となり発表・プレゼンを通して、市内の学校・市民へ広く発信する催しである。本校は枚方市以外からの通学生も多く在籍する私立学校ゆえ、基本的に「地元感」を持ちにくい環境にある。このような公立学校が対象のイベント参加から地元学校との繋がりを深め、「10年後、戻りたくなる枚方のまち」のさらなる充実に寄与できればと考えている。

**(2) 生徒の変容** 一連の取組によって、以下のような生徒の変容が見られた。

- ① 「探究サイクル」定着により高校での「探究学習」を中等部卒業生がリードしている。
- ② 「TG10Cs」の観点において生徒が自己の成長を実感できている。特にプレゼン力・コミュニケーション力の伸長が著しい。
- ③ 他人を尊重しながら市民として社会に参加し、その役割を果たせるようになることを目指す「シチズンシップ」の基礎が育まれている。
- ④ 商業施設でのアクリル板再利用ワークショップで、他団体の「光るペン」ブースに子どもたちが流れてしまい、生徒は「集客の必要性」を痛感していた。アイデア実現には商品やサービスの仕組み等の視点も必要と気づき、マーケティング戦略に自然に関心を持つようになった。創造性のみならず「現実」を考慮する気づきを得られたことも成果と言える。

**(3) 持続可能な活動への進化**

今年度は3大テーマのうち2テーマを実現することができた。2024年度に控えている「五六市」への出店は、次学年が引き継いでアイデアを考案して実現へと向かっている。また、SDGsでよく取り上げられる「3R」(リサイクル等)の事業についても、より社会に必要とされる「アップサイクル」視点での新たな取り組みも予定している。

時代の求めるメッセージに敏感でありつつ、普遍的な価値に繋がる学習活動への取り組みを今後も推進していきたいと考えている。



Jury's Special Award

Lao Japan School  
 Principal, Lim Boon Hock

Title of report: Education for Sustainable Development in Lao-Japan School

1. Introduction

We envision to become a model school, educating students to be future-ready and have a strong sense of national identity. Our mission is to nurture students to develop a sharp mind, a solid knowledge base and a kind heart. We aim to share our best practices with other schools on providing quality education, achieving sustainable green environment and participating in community services.

2. Contents of practice

2-1 Quality education: Our curriculum follows the directives of Lao's socio-economic plan, working closely with Sikhottabong District Education Bureau. On a monthly basis, our teachers create activity books to enhance students' learning to complement the textbook resources. Our extra curriculum are weekly table-tennis and swimming classes. Parents' Club plays an important role on bridging the gap between school and home teaching.

Every Monday morning, we conduct flag raising ceremony. We set-up storybook reading corner and noticeboards to share information among teachers and parents. Classroom size is kept at 15 students for teacher to reach out to students. The 5s; Seiri, Seiton, Seiso, Seiketsu and Shitsuke are where we trained students to tidy-up their classrooms before going home. Every classroom has a shoe rack labelled with students' photograph and name. Our school clinic provides first aid treatment and we conduct semi-annually fire and intruder drills for teachers and students.

Our Befriender program pairs up senior and junior students when senior guide junior on school life. We actively organize student exchange activities with local and foreign schools. Annually in July-August and the month of March, we receive volunteers from Rikkyo University, namely the 'Japan Weeks in Laos' program.

2-2 Sustainable green environment: We implement 3R – Reduce, Reuse and Recycle, and separate garbage into paper, plastic and glass. Kitchen waste is recycled to produce compost for garden vegetables and fruit trees. Students dry hands with cloth towel instead of paper tissue. Student flash toilet and wash hands after using toilet, they also wash hands before meals and brush teeth after eating. Canteen floor is swept and mopped three times a day.

In the morning, students greet teachers at the school gate before entering school compound. In the school canteen, students queue up to receive food and return tray to washing point after meal. We serve dietary balanced food – grains, fruits, vegetables, protein and dairy. We abide to on No MSG policy.

2-3 Community services: we participate in fund-raising for children hospital via selling students' paintings. Monthly trimming of grass and tree trunks; and daily sweeping of dried

leaves for neighborhood. Mosquito spray on surrounding drainage to prevent dengue disease.

### 3. Results and issues

It is one of our objectives on building a sustainable society. Education shapes a person's thinking and attitude and; besides teaching languages, science and mathematics in classroom setting, we conduct activities like tree planting in school compound, reuse plastic bags and recycle kitchen garbage into compost for growing vegetables. Students receive etiquette training for good manners and learn to be sensitive to people around them. Students perform community services such as picking up rubbish in neighborhood and baking cookies for poor families living in school vicinity. Some students respond to calls on cycling or walking to school for reducing air pollution caused by fumes of vehicles.

As a result of our activities, students learnt about the importance of green environment through Reduce, Reuse and Recycle activities. They understood the coexistence with neighborhood for a harmonic society through performing community services. They showed sympathy by delivering cookies to poor families and were informed about air pollution caused by fumes of vehicles. Some senior students raise questions and discussed with teachers or expressed their concerns through drawing pictures on environmental issues. They greeted parents who fetch them after school as well as when there were visitors in school.

Students' attitude and values also change when they become conscious about the environment when they gave rabbits banana leaves or grass instead of animal feed. Teamwork was witnessed on many occasions such as during Sports Day event, cleaning classroom and senior guiding junior buddy students around school. Students always look forward to the date of baking cookies for poor families. They understand food wastage; hence they would consume all food served to them. They helped teachers on classroom decoration to make sure 5S was maintained. Parents feedbacked that their child helped in household chores and was respectful in family.

Our activities transform teachers' awareness about integration, teamwork and whole school engagement in school events. Teachers understood school philosophy, vision and mission. They support school system of working whenever there is an event. They never complain even when work pile up and have to perform overtime work or return to school to continue on weekends. Teachers' meeting that is held on every Monday afternoon is a two-way communication between school management and teachers. Teachers work enthusiastically to ensure successful in event such as 'Respect the Elderly Day', 'Lao National Day', 'Setsubun-sai' etc. Please refer to school Facebook laojapanschool for a glimpse of events.

The issues and prospect of coming years are strengthening Parents' Club between teachers and parents on disseminating practices in school. Parents play important role in supporting what that was taught in school and at home. For example, child learnt about reuse, recycle and reduce (3R) in school, and parent's action at home was conflicting the 3R, it confuses the child. A long-term challenge is tuning the mindset of children on respecting others and environment while giving back to society when they grow up. For the coming year, social media will be used to share best practices via educational videos uploaded to Youtube channel.



Photograph 1: Lao cultural event – Saiba-tsu



Photograph 2: Sorting out plastic, paper and metal



Photograph 3: Using leaf as a teaching material



Photograph 4: Gardening



Photograph 5: Japanese cultural event – Setsubun-sai



Photograph 6: Enjoy school life